

ある地理学者のハノイ滞在記

船 引 彩 子¹⁾

1. はじめに

私は2009年4月に、産総研の専門技術者短期育成事業に採用され、地質情報研究部門沿岸堆積研究グループに配属されました。産総研に入所する以前、卒業研究から約10年間、ベトナム北部、紅河デルタ北部平野の河川地形と遺跡分布の関係に関する地形学的研究に携わってきた経緯もあって、1年間は紅河デルタに関する研究を継続しました。2010年4月からは地質情報研究部門のテクニカルスタッフとしてホストの木村克己主幹研究員の下、地下地質情報の収集・整理と3次元地質モデル構築に関わる業務を行っています。

長きに亘るベトナムとの付き合いの中で、特に、東京大学大学院博士課程在籍中の2005年4月から2007年3月には前述の研究テーマを目的とし、文部科学省海外派遣留学生、アジア派遣特別枠の学生として、VNU (Vietnam National University, Hanoi, University of Science, Faculty of Geography :ベトナム国立大学ハノイ校、ハノイ理科大学とも呼ばれます) に留学していた経験があります。今回、地質ニュース編集委員の七山 太氏より、“このような貴重なベトナム留学の経験を後進研究者のためにも文章として残しておいてはどうか？”との勧めを受け、今回執筆の機会をいただきました。ハノイの生活ではいろいろなことがありましたが、小稿では私が留学生活で感じたことを写真を交えてエッセイ風にご紹介したいと思います。

2. ハノイでの生活

日本人の視点から見たベトナム南部、ホーチミン市やメコンデルタ地域の風土や文化については、特に

温暖な気候や食文化などについて、渡辺(2008)に詳しい記述があります。これに対して、首都ハノイを擁するベトナム北部はいろんな部分で南部とは異なります。

2005年4月、私はハノイに到着してすぐに滞在中の間借り先を探し始めました。それまで何度も現地調査で行っていましたが、長期間定住するのは初めての経験です。もちろん日本のような不動産屋さんはないので、長年ハノイに住んでいる日本人の友人の伝手を頼りにして、大家さんを紹介してもらいました。このような間借りの場合、ほとんどが大家さんのお宅の一部屋をお借りする形式で、夕食も一緒にいただく賄い付きが一般的です。このようなケースでは夕食代は別途月極めで支払います。私は最初の2ヶ月間ベトナム人の家庭で間借りしてから、その後アパートを見つけて引っ越しました。

最初に間借りさせていただいたお宅はハノイの中心から少し離れた下町風の雰囲気のところであり、商家のようでした。この家の親族の集まりに招かれた時には、部屋奥の大きな寝台に寝そべったゴッドマザーのようなお婆ちゃん存在感に圧倒されました。この家のお母さんはものすごい節約家、カカア天下であり、いかにも女性主導のベトナム的な家庭でした。過去にも外国人留学生をお世話した経験があるらしく、サービスが細かく行き届いていて、お部屋のお掃除も頻繁にしてくれました。

2ヶ月後に引っ越したアパートの大家さんは奥様がパストゥール研究所にお勤めで、ハノイの市街地にフランス植民地時代のフレンチヴィラを改造した官舎を与えられています。彼女はいわゆる共産党員であり国家公務員の方ですが、最近開発された郊外の住宅地に4階建て新居を購入したため、官舎として使っていたお部屋をアパートとして外国人に貸し出しておら

1) 産総研 地質情報研究部門

キーワード: ハノイ, ベトナム北部, 紅河デルタ, 地形学, VNU



写真1 フランス植民地時代の建物を改造したアパート
(写真提供：設楽澄子氏)。



写真2 ハノイの冬は寒い、コートを着て路上で将棋を楽しむ人々。

れたそうです。私が入居した時には特別にエアコン(冷房専用)も付けていただき、シャワールームも改装してもらいました。フレンチヴィラ風のアパートと言うと聞こえはいいのですが、さすがにフランス植民地時代の年代物の建物なので壁や柱などは穴だらけで補修も十分にはされておらず、冬場は隙間風が吹きすさみ寒くてたまりませんでした(写真1)。

ちなみに渡辺(2008)で紹介された南部のホーチミン市とは異なり、亜熱帯気候に属する北部のハノイには四季があります(写真2)。特に冬場の冷え込みは厳しく、気温が5℃を下回ることもあり、「旧正月には老婆が凍死する」という諺があるほどです(桜井, 1989a)。多くの家には暖房設備はなく、しかも体感温度はかなり寒く感じるので室内で仕事をする時もコート等で防寒対策をしないといけません。反対に夏は暑く、また湿度が高いためあちこちにカビが生えます。ハノイの街を歩いていると、比較的新しく見える建築物でも1年ほどで壁が黒ずんでいるのをよく見かけます。私の部屋も1ヶ月ほど日本に帰国している間に部屋がカビだらけになって大変でした。他にも雨季の大雨の時には屋根が雨漏りしたり、ネズミに食料や洋服、果ては貴重な書籍や資料までかじられ、家具の後ろにアリの巣ができ、と予想外のハプニングが続きました。

私がお世話になった2軒のお宅は両方ともお子さんを海外留学に行かせており、将来の立身出世のためにも教育熱心なベトナム人の一面を垣間見ることができました。1軒目のお宅では外国人留学生の家賃を主な収入源として、一人息子をオーストラリアに留学させるためにお母さんが一生懸命お金を貯めてお

り、私が引っ越すと言った時にはあの手この手で引き留められて大変でした。

2軒目のお宅の旦那さんは幾つかの民間会社で働いているようですが、その詳細は最後まで教えてもらえませんでした。こちらのお宅でも大学生の息子さんがフランスに留学しているため、仕送りが大変なようです。またお金の管理はすべて女性が行い、男性には決定権は一切ありません。私も2軒のお宅両方で家賃・光熱費はすべて奥さんにお支払いし、家賃の交渉時にも旦那さんはベトナム語・英語の通訳として来てもらうだけで、ほとんど奥さんの意見で家賃が決まりました。確か100-150ドル/月ぐらいだったと記憶しています。

食事はお米が主食です。毎日食卓に上るのはご飯



写真3-1 ピンザン(大衆食堂)での食事。ご飯・スープ・揚げ豆腐・野菜炒めなどが並びます。好みで塩、唐辛子、レモン汁や醤油で味付けをします。VNUの先生はいつも唐辛子をそのまま酒のつまみにして食べていました。



写真3-2 ベトナムでは米麺が一般的であり、フォーやブンと呼ばれる米の麺はハノイ名物のベトナムのファーストフードでもあります。右の写真はブン・トムと呼ばれる料理。ブンと、揚げ豆腐、野菜、を味付けしたmam・tom(エビを発酵させた調味料、匂いが強烈)に付けて食べます。左の写真はガイン(肩かけ籠)に乗せて運んできた七輪の上で豆腐を焼いている様子。このような即席屋台がお昼時にはあちこちで見られます。

と野菜のスープ、空芯菜の炒め物や蒸し鶏、豚肉の炒め物や煮物、川魚の煮物などがあります。フォーやブンなどに代表される米麺も日本のうどんやそばのように日常的に食べられます。私の朝ご飯はいつも屋台でソーイ(おこわ)をいただいていた。ハノイは内陸部に位置するので日本のように海魚は食べません。ハノイの人は特に肉が好き人が多いようです(写真3-1, 3-2)。

ベトナム料理と言うとよく生春巻きやエスニックサラダなどがマスコミで紹介されていますが、北部の家庭料理ではあまり食べられることはありません。味付けも南部のものに比べて塩や醤油の味が強く、漬物なども一般的で、日本食によく似ていました。また、雑穀や豆類も多く使用されており、豆を発酵させた味噌のような調味料もありました。

3. ベトナム語を学ぶ

私の留学の目的の一つはベトナム語の習得です。私はまず大学付属のベトナム語教室を訪ねました。私が留学した当時、学校の個人レッスンでは確か8ドル/時間ほどでしたが、実際に講師に支払われる時給は1ドル/時間だったそうです。つまり7ドルがピン撥ねということになります。そのうち「学校には内緒ね」と言われながら、講師のお宅で5ドル/時間のレッスンを受けることになりました。ほとんどの講師がこのように語学学校で生徒を「スカウト」して自宅で教室を

開いていますが、表立って口にするには決してありません。この辺りの本音と建前の使い分けはベトナム人の得意技です。

ベトナム語はもともと中国から輸入された漢字(チュノム)を使って表記されていましたが、フランス植民地時代にアルファベットがもたらされ、ローマ字表記が奨励されるようになりました。20世紀初頭の民族運動の高まりとともにベトナム語のローマ字表記は広く普及し、今日ではベトナム語はすべてローマ字表記であらわされるようになりました。このおかげで、ベトナムは東南アジア諸国の中でも識字率が最も高くなり(約95%)、学歴のない人でも日常新聞を読むことが習慣化しており、このため、一般の人でも政治経済についての知識や関心を持っています。

ベトナム語は6種類の声調があります。この声調を使い分けるのは、平坦な発音の日本語を話す我々日本人にとって大変難しく、ベトナム人に聞き取ってもらえるまで時間がかかります。文法としては人称詞が複雑で、会話の初めに相手の年齢を聞く、もしくは自分よりどのくらい年が離れているか一瞬で見分けることができない場合は、きちんとした敬称を使うことはできません。自分より年上の人に間違って年下の人称詞を使うととても失礼になりますし、逆に年下の人に年上の人称詞を使うとひどく恐縮されます。儒教文化が深く浸透しているベトナムは、年齢による秩序が厳格に保たれている社会ともいえます。ベトナム語が少しずつ分かるようになってくると、友人のベトナム

人がいかに巧みに人称詞と敬語を使い分け、また上流階級のベトナム語がとても綺麗で奥ゆかしいことに気付かされます。ちなみに南北に細長いベトナムでは、北部・中部・南部で訛りがあり、北部弁を勉強した私にとって南部弁はとても聞き取りにくく感じます。

ハノイへの日本人留学生は年々増加しています。一番多いのが語学留学、ベトナム語専攻の学生だけでなく、ベトナム語とは関係ない学部にも所属していても、何となくベトナム語に興味を持ってお金を貯め、私費留学している学生も多く見られます。一方、研究目的で留学しているのはほとんどが大学院生であり、歴史学、民俗学、農学、経済学などそれぞれの分野で活躍する研究者の卵たちです。その中には、研究を行うために中国とベトナムを行き来している人もいました。大学院生の多くが現地滞在し、半年間のベトナム語の研修後、目的の調査を開始します。

ハノイの日本人留学生たちの結束力は強く、研究・生活の両面において強固なネットワークで情報網を広げ、遅しく生活しています。私のような地形分野の学生はほぼ皆無でしたが、逆に日本では知りあうことのなかった他分野の留学生と情報を交換し合い、助

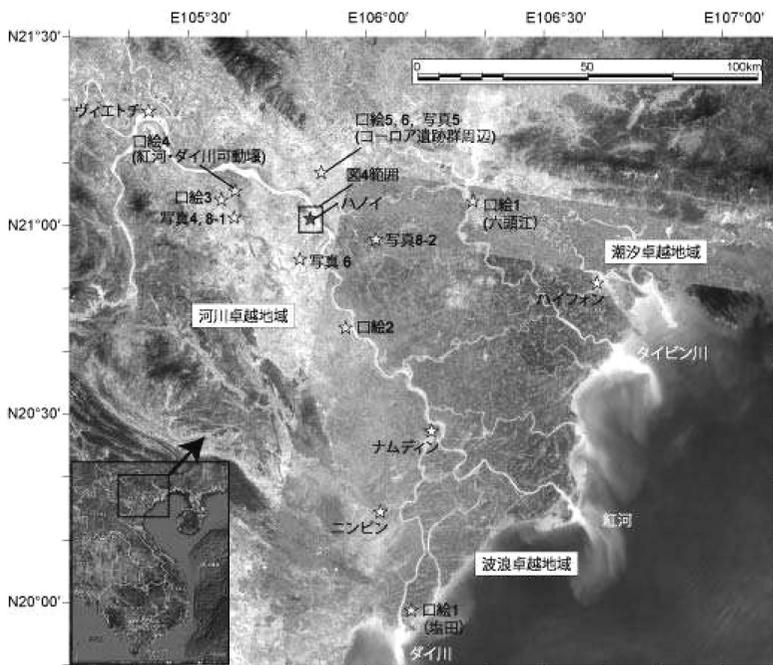
け合い、さらには研究上でも深い交流ができました。

4. 紅河デルタの発達史、ハノイ周辺の河成地形とハノイの歴史

ヒマラヤ山脈の東端、標高3,000mを超える雲南山地に水源を持つ紅河は、北部ベトナム山地に降った雨を集めながら、紅河デルタ平野の頂点に当たるヴィエトチまで紅河断層上をほぼ一直線に流下します。紅河の全長は約1,200km、流域面積は168,000km²あり、鉄分を多く含んだ赤い水に含まれる土砂供給量は130×10⁶トン/年で世界の大河川の中でも土砂供給量の大きな河川として知られています(第1図)。

一般的に東南アジアの大規模デルタを形成する大河は長くゆったりした平野を蛇行してからデルタに入るので、洪水と言っても緩やかな水位上昇が起こるのですが、紅河だけは大量の水が直線状に流れ下って平野域に急激にあふれ出るので、鉄砲水型の洪水になりやすいとされています(桜井, 1989a)。ヴィエトチから紅河デルタ平野に下った紅河はハノイの東北で東と南の2つに分かれ、さらに約100km、無数の支流を作りながらトンキン湾に流入します。

デルタ平野として見た場合、紅河デルタは河川・波浪・潮汐の影響を受けたデルタとして分類されています(Mathers and Zalasiewicz, 1999)。現在でも河口に近い平野南東部(波浪卓越地域)では浜堤列を伴うデルタの前進が見られる一方で北東部(潮汐卓越地域)には潮汐低地が広がっています(口絵写真1)。さらにハノイを中心とする氾濫原(河川卓越地域)では自然堤防を伴う蛇行帯が発達しています。氾濫原の地形のうち、自然堤防は幅最大8km、後背湿地との比高差は最大で5-7mにおよび、ミシシッピ川など自然堤防のよく発達する世界の大川と十分比肩できるほどの規模を持っています(Brierley et al.,

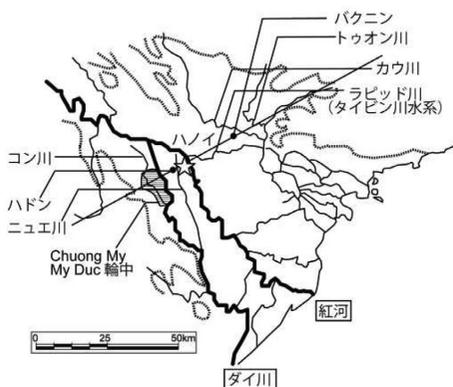


第1図 ベトナム北部、紅河デルタの衛星画像およびハノイ位置図。Landsat TM 画像を使用<<http://glcfapp.glcfc.umd.edu:8080/esdi/index.jsp>>。



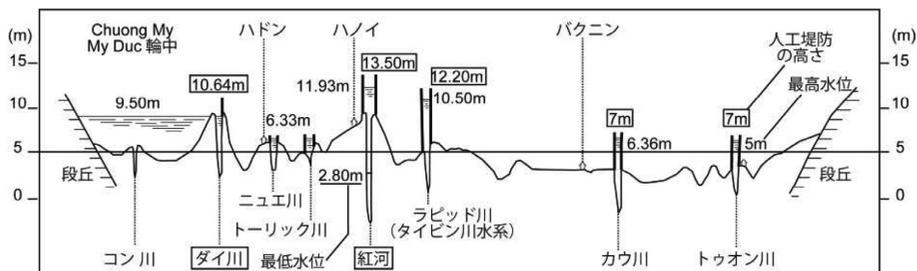
写真4

西沱濫原低地の西端は更新世段丘と石灰岩山地で区切られ、石灰岩山地の卓越する地域では、中国の桂林のような風景を呈しています。このような山地には洞窟が多く、寺院や祠が建てられるなど古くから信仰の対象となってきました。写真はハノイ郊外の観光地となっている天福寺。寺院周辺の池は旧正月に水上人形劇の舞台として利用されることもあります。



第2図

紅河デルタ平野北沱濫原および西沱濫原の横断面図 (桜井, 1980 ; Gourou, 1936参照)。



1997). この蛇行帯が発達しているのは主に紅河本川沿いとハノイの西方で分流するダイ川沿いが中心で、西沱濫原やハドン輪中帯と呼ばれてきました (桜井, 1989b ; Gourou, 1936). その西端は更新世段丘や石灰岩山地によって境され (写真4), 2つの河川は共に大量の土砂供給によって“天井川”化の傾向を示しています (口絵写真2・3・4, 第2図).

約9,000年前より、紅河の堆積物は最終氷期に形成された開析谷を埋積し、デルタを前進させてきました。沿岸部のデルタ前進とともに内陸部では完新世中頃から河成堆積物が見られるようになり、自然堤防

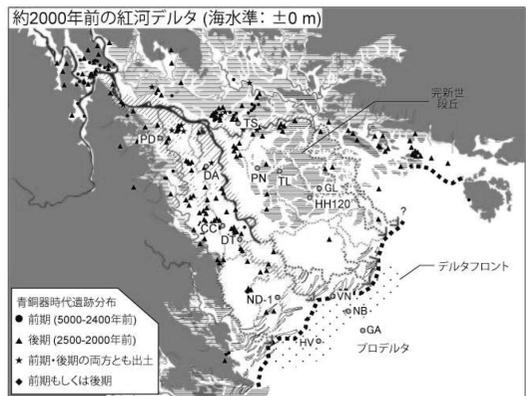
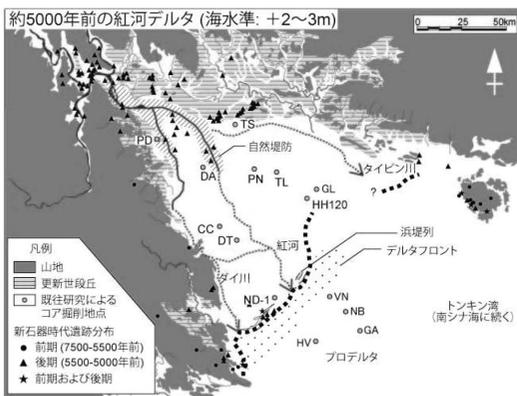
や後背湿地が形成されました。紀元前5世紀ごろから北部ベトナムはドンソン時代と呼ばれる発達した青銅器鉄器文化時代を迎え、ハノイから見て紅河北岸の更新世段丘地域にコーロアと呼ばれる巨大な都城遺跡が作られました (口絵写真5, 写真5)。ちょうど日本の弥生時代に当たり、平野では自然堤防を利用した人の定住が見られるようになりました (第3図, 写真6)。ハノイ南方では当時の豪族の墓やドンソン・ドラムと呼ばれる銅鼓などが発見されています。

そのような自然堤防地帯に位置するハノイは東南アジアで最も古い町の一つであり、漢字では「河内」



写真5

平野周辺の更新世段丘と沖積低地は緩傾斜斜面や段丘崖によって区別できます。紅河北岸のコーロア遺跡群。口絵5のような更新世段丘の縁に位置しています。コーロア城の土塁跡が現在でも残っており、写真の点線部分が土塁の頂部(写真右)にあたります。



第3図 紅河デルタの古地図と遺跡分布の変化。約5,000年前(左)から2,000年前(右)にかけて海水準の低下・平野の発達とともに遺跡が広がっていく様子が分かります。

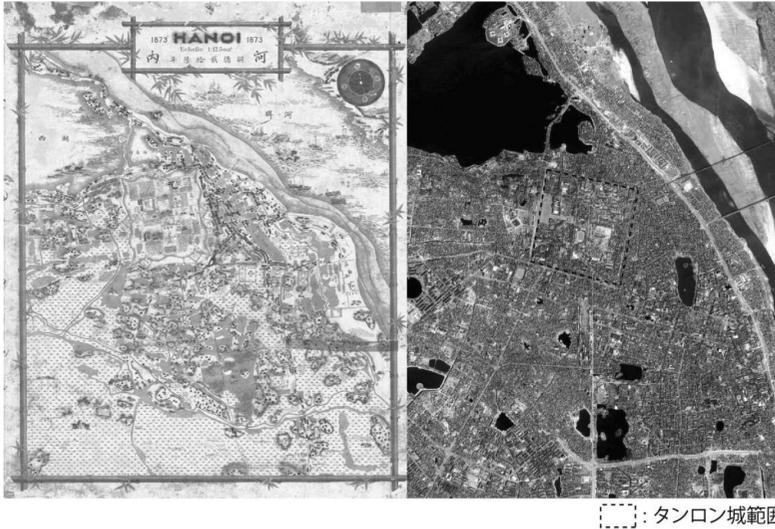


写真6

西沱濼原の自然堤防上に立地する集落の入り口。西沱濼原で漢字名を持つ集落の起源は堤防の建設されていた15世紀に遡ります。その頃までに自然堤防のほとんどは人の居住地域として開発され、15-19世紀の間に集落数の大幅な増加は見られません。

と書きます。東と北を紅河、西と南は紅河の支流に囲まれた、まさに「河の内」の町と言えます。現在のハノイ市街地の大部分は自然堤防を中心にその周辺に広がる湖沼や湿地を埋め立てられた地域から形成されています(桜井・柴山, 2007)。

ハノイは長らくベトナムの政治的中心地として栄えてきました。ベトナムが中国に服属していた7世紀の初めごろ安南都護府が置かれたのに始まり、1010年に李朝が遷都してタンロン(昇竜)城を建設し、フランス植民地時代のインドシナ連邦総督府(1882年)、ベトナム民主共和国の首都(1954年)、ベトナム社会主義共和国の首都(1976年)として、1802-1887年の阮朝時代を除き、一度も廃墟になることなく歴史が続いています(第4図)。中世都市が近代都市へと変遷した、東南アジアのデルタに立地する都市としては珍しい例です。またハノイ中心部に位置するタンロン城の



第4図

ハノイの1873年の古地図(左)と2005年の衛星(IKONOS)画像(右)(米澤, 2008を改変)。左上が西湖, タンロン城はほぼ正方形の形を示し, 周辺に湖や村落が交互に立地します。かつては自然堤防上にしかなかった集落が, 湖の埋め立てによってその範囲を広げていったことがわかります。

---: タンロン城範囲

発掘現場は, 過去約1,000年間に亘り首都機能を果たしてきた証拠を示す遺跡として世界的にも貴重なものです。発掘作業は日本の考古学者が指揮しており, 私の留学期間中には当時総理大臣であった小泉純一郎氏も視察に訪れました。ちなみに2010年はハノイが都になってからちょうど千年とされ, 市内各地で記念行事が行われたそうです。

5. 紅河デルタの築堤とハノイ遷都の歴史

乾季には降水量が激減する他の東南アジアのデルタと違い, 紅河デルタ平野では乾季に当たる冬に霖雨^{りんう}が降り続き, そのおかげで雨季には沼になってしまうような低地でも乾季に水田耕作をすることができました。他の東南アジアデルタが19世紀になるまで開拓されなかったのに対して, 紅河デルタ平野だけがすでに紀元前後には開拓され, 人が定住できるようになっていたのは早くからの自然堤防の発達や, この霖雨のおかげとも言われています(桜井, 1980, 1989a)。

ただし, 霧雨の雨量は少なく降り方も不安定なため, 紅河デルタ平野では早くから人工灌漑^{かんがい}が発達し, 田植えなどの作業が行われていました。一方で夏には洪水が頻発し, 多くの被害をもたらしてきました。このような背景のもとに, 地方豪族や中央集権国家が中心となって古くは紀元前後より築堤作業や灌漑施設の建設が進められてきました。

現在の紅河デルタ平野には自然堤防の地形を巧み

に利用して, 馬蹄形の輪中堤防が張り巡らされています。その基幹部分は陳朝時代(13-14世紀)の大規模な工事で始められ, 15世紀以降建設が盛んになり, 17世紀ごろにはほぼ完成していたことが知られています(西村, 2007)。西氾濫原では, 築堤工事とともに三期作が広く行われるようになりましたが, 耕作地域の拡大と同時に洪水も頻発するようになり(桜井, 1989a), 必ずしも堤防の効果が万全であったとは言えなかったようです。

洪水時にはハノイの西方に位置する輪中堤の堤内地に洪水流を流し込むことでハノイ中心部の浸水を回避してきました。紅河の河床は支流のダイ川よりもずっと低くなっており, ダイ川もかつては現在の紅河以上の流量・堆積量があった可能性が考えられます。ダイ川はフランス植民地時代に建設された可動堰や越流堰(口絵写真4)によって上流部ではほぼ水無川と化していますが, 紀元前後の漢による支配時にはハイパー・チュン(チュン姉妹)の戦いなどの歴史上の出来事にも度々登場し, ベトナム南部海上交易の中心地であったチャンパ王国との主要な舟運水路とされており, 人々の生活にとっても重要な位置付けにありました。

6. ベトナムでのホスト機関と地形資料の収集

社会主義国家であるベトナムでは, 市内の観光地を除いては日本のように自由にあちこち行けるというわけではありません。調査には必ずお目付役のベト

ナム人が同行しないといけませんし、政府の許可証も必要です。近年、14日以内の観光用の滞在であれば事前にビザを入手する必要はなくなりましたが、私がベトナムに行き始めた当初は観光でも事前にビザを入手する必要があり、代々木のベトナム大使館に度々足を運びました。

ベトナム国内でこれまで私がお世話になったホスト機関は3つあります。まずはVASI (Vietnam Agricultural Science Institute: ベトナム農業科学技術院)、ここには京都大学東南アジア研究所の学生が多く出入りしており、私は卒業研究時にハノイ郊外の集落への聞き取り調査の許可を手配していただきました。その他にも空中写真や地形図の手配、土質ボーリングデータも収集していただきました。現在この機関は組織改編されてハノイのオフィスはなくなり、収集していた空中写真や土質ボーリングデータも行方不明になってしまいました。当時、私がお世話になったホストの方も地方に行ってしまったようです。

次にお世話になったのがVNU (Vietnam National University, Hanoi, University of Science, Faculty of Geography: ベトナム国立大学ハノイ校、ハノイ理科大学とも呼ばれます)のVu Van Phai教授と研究室の皆さんです。こちらでは大学院の修士課程から何度も現地調査に同行していただき、留学時にはホストとして諸手続きを行っていただきました。私が留学する数年前に奈良女子大学の学生さんがこちらの地理学教室(人文地理)に留学されており、私の留学手続きも比較的スムーズに話が進みました。

修士論文のボーリング掘削調査ではベトナム地質鉱物局 (Department of Geology and Minerals of Vietnam)にお世話になりました。VAST (Vietnam Academy of Science and Technology: ベトナム科学技術院)ではボーリング資料を提供していただき、研究者の方には現地調査にも同行していただきました。

また、紅河の水量データに関しては上記のVASIの他に、水道局 (Ministry of Natural Resources and Environment, Department of Water Resources Management)からも、考古遺跡の資料についてはベトナム考古学院 (Institute of Archeology, Vietnam Academy of Social Sciences)から提供していただきました。いずれも、私が所属していた日本の研究室に留学したことのある、ベトナム人の友人が勤めています。

社会主義国であるベトナム(写真7)では、地形図・



写真7 ハノイの地理学科50周年記念の式典。民族衣装のアオザイで正装した女子学生と共産党のカラーである赤いネクタイを締めた男子学生が愛国歌を歌います。ベトナムでは正式な会議場には必ず国旗・共産党旗とホーチミン像があります。

空中写真は原則として国外持ち出し禁止です。5万分の1の地形図はVASIを通じて購入したものが京都大学東南アジア研究所で、日本軍進駐時の外邦図(20万分の1)が岐阜県図書館で公開されていますが、それ以外に日本人が地形図を入手するのは至難の業です。私も最初のころはハノイの繁華街で密売人(?)のおばさんから一枚7ドルほどで購入していましたが、留学して正式に大学側に協力を依頼することができるようになり、地理学教室を通して2.5万分の1の地形図を購入しました。最近ではデジタル標高地形図も出版されており、ホストを通してきちんとした手続きをとれば、正規ルートで購入することが可能なようです。私もVNUの地質学科の先生を通して現在交渉を行っています。

また地形の研究をするのに欠かせない空中写真は、上記のようにVASIを通じて米軍撮影のものを購入してもらいました。ただし、標定図もないので自分で地形図と照合しなくてははいけません。かなり古いもので欠けている地域も多く、画像がぼんやりとしているものもしばしばあります。他に地質鉱物局のGeological Mapping Division of North Vietnamには紅河デルタ南部のナムディンをはじめ、比較的広範囲の空中写真と立体鏡もあり、修士でのハノイ滞在中には数日間ここに通って立体視の作業をさせていただきました。またVNUにも比較的新しい空中写真がありました。東西南北で重なっている範囲が少なく、立

体視は断念しました。その他、土質ボーリング試料は当初VASIを通して200本ほど入手しましたが、地域的に偏りが多く、その後VASTの研究者から入手した資料を用いて整理しています。このような資料も情報公開の進んでいる日本とは異なり、しつこく粘って聞いてみないとなかなか出してもらえません。逆にあちこち人脈を作っておくと、思わぬところから情報がもらえることもあります。

一般的に、ベトナムの各研究機関は縦社会であり、組織横断的な連携がほとんどなく、長期滞在であればホスト機関を通したビザが必要になります。そのため、滞在中に他の研究機関からのサポートを受けることはできません。特に外国人研究者への監視は厳しく、30-20年前は外国人研究者がハノイでホテルに滞在していても公安機関の尾行が付くこともあったそうです。現在では多様な分野で各国から多くの研究者が出入りするようになり、外国人への警戒感はいぶ薄れたようですが、それでも複数の研究機関でお世話になっていることが分かるとやはりいい顔はされません。私はたまたま学生で何の肩書もなかったので比較的自由に身動きできました。

私がこのような諸機関とやり取りできるのは、ドイモイ以降にベトナム国内で奮闘した日本人研究者の努力があってのことです。まだ経済も不安定なハノイで生活し、農村に入って生活を共にしながら地域研究を続けてきた大学の先生方や、研究者、留学生の皆さんが日本という国の「顔」を作ってくださいました。卒業論文から10年以上に亘り、ご指導いただいた春山成子先生（現三重大学大学院生物資源学研究所教授）、2009年には1年間、沿岸堆積研究部門でお世話になったホストの齋藤文紀首席研究員をはじめ、私がベトナムでお世話になったいずれの機関にもベトナム人研究者を日本に招聘してくれた日本人研究者とのつながりがあり、「自分を日本に招待してくれた（もしくは一緒に仕事をさせてくれた）〇〇先生の紹介だから」ということでずいぶんよくしていただきました。

7. ベトナム調査の現場について

ベトナムに行き始めた当初は担当教官や他の日本人研究者と一緒にだったので、運転手付きの自動車を用いて数日間泊まりがけで地方に出かけたりすることも多かったのですが、私一人で動くのに車を利用す

るわけにはいきません。幸い調査地域もハノイから遠く離れることはなかったので留学中は基本的に1ヶ月に1~2度、大学の先生や学生さんに同行していただいて何台ものバイクを連ねて日帰り調査に出かけていきました。

前述したように、この国では地形図は機密情報なので現場で見ることにはできません。ただし私の留学期間中は公式な調査というよりも学生巡検の延長のような形で実施させていただいており、移動手段もバイクであったりしたためにそこまで厳密な制限はなく、現地で地形図を広げても特に注意されることはありませんでした。ときどき地域の公安らしい人に呼び止められることもありましたが、同行していたVNUの先生がうまく交渉してくださって難を逃れることができました。

現地では露頭で炭素同位体年代測定用の試料を採取したり、日本から持参したハンドボーリングを使い、VNU地理学教室の学生たちに手伝っていただいて手動で掘削調査を行いました。機械が壊れた時はベトナム鉱山地質大学の先生にお願いして市内の工事事務所にあったハンドオーガーをお借りしたこともあります。

学生はこのような道具は見たこともありません。手とり足とりで使い方を教えます。夏の暑さが厳しいベトナムでは、沖積層といえども表層土壌が酸化して固結しているので、なかなか作業が進まず、丸一日かけて3mということもありました。調査は朝7時に出発して昼過ぎに終わって現地でお昼ご飯を食べ、午後の最も暑い時間帯がやってくるまでにハノイに帰るようにしていました（表紙、写真8-1、8-2）。

2009年度より、私は留学中に採取した試料の炭素同位体年代のデータと空中写真判読から得られた地形分類図を用い、紅河デルタ平野、特にハノイ周辺の河道変遷についてデータの取りまとめを開始しています。この研究成果によって、これまで歴史学者間で文献上での机上の議論しか行われていなかった領域に、科学的な地形情報を取り入れることで、より高精度な議論が行えるはず、と私は考えています。

8. ベトナムには恩がある

私が留学をしようと決めたのは卒業論文、修士論文で何度も日本とベトナムを往来するうちに、もっと



写真8-1

ハノイの郊外は湿地帯が多く、長く水田として利用されていたが、近年の経済成長に伴い開発が進んでいます。建設現場では沖積層の露頭も多く見られました。写真左では、後背湿地の堆積物の下にチャネル堆積物が見られました。VNUの学生に手伝ってもらって高さを測定しています。写真右、白点線より上は後背湿地の泥層、その下にはチャネルを構成していたと見られる砂質の堆積物(左)や砂泥互層からなる自然堤防の高まりを持つ堆積物(右)が見られます。



写真8-2

ハノイの建築物はほとんどがレンガ造りです。郊外では後背湿地のシルト～粘土層を掘り出して固め、レンガを焼いている工場が多く見られます。土を掘り出した後は沖積層の露頭が見られますが、雨季には水没してしまいます。写真右はベトナム地質鉱物局のNguyen Van Quy氏。氾濫原の泥層の中に木片を見つけました。

深く彼らの文化に触れたい、また、自分の研究結果を少しでもベトナムという国に還元したいと思ったからです。留学前は「なぜ留学を？ あなたの研究ならベトナム語なんて勉強する必要ないでしょ」と言われることも多かったのですが、実際に住んでみて本当によかったと思います。

ベトナム人の文化、道徳観や志向性など、実際に住んでみなくては分からないこともたくさんありました。不幸にも滞在中に犯罪や事故に遭うなど苦い経験もありましたが、今では「自分の身は自分で守る」というごく当たり前のことを、身を以て知ることができた貴重な経験となっています。ベトナム人女性は人前でお酒を飲むことはめったにありません。服装にも気を付けて、素肌を露出しないように、スカートは穿かず、必ず袖のある服を着ます。夜遅く出歩くこともなく、普段の話し言葉にもとても気を付けています。とても慎重深く、用心深い人たちなのです。

留学中は機会があればできるだけ地方にも出かけるようにしました。現地在住の日本人向けフリーペーパーの取材に同行して中国との国境地帯に出かけたり、地方出身の友人の里帰りに同行させてもらったり、ニャチャンでは海にも潜り、ベトナムのいろいろな風景を見て、ベトナム人の友人もたくさんできました。昔からの上流階級の人もありますし、地方の農家から出てきて、ハノイで靴磨きからビジネスを始め、会社を立ち上げたというツワモノもいました。社会主義国という特殊な政治的背景や、愛国心や社会階層の裏にあるベトナム戦争の影も時折垣間見られ、日本人としての自分の生き方を改めて問い直すことも度々ありました。ベトナム人の友人に共通して言えるのですが、彼らはとても我慢強く、どんなに悲惨な状況にあっても決して不平不満を言いません。例え辛いことがあっても笑って前に進みます。私の周りの日本人留学生(特に若い学部生さん)が、ベトナム生活の不

便さにすぐに文句を言う姿を見ていて、本当に対照的に感じました。かく言う自分もベトナムに行き始めた当初はこんな感じだったな、と懐かしく思い出したりもしましたが...

小さな島国から来た生意気な小娘に、長い歴史を持つ大陸の国は本当にいろいろなことを教えてくれました。素晴らしい時間と研究の機会をくれたベトナムとベトナムの人たちに心から感謝の意を示し、小稿を締めくくりたいと思います。

謝辞：私のベトナムでの研究は本当にいろいろな方に支えられてきました。担当教官でもある三重大学の春山成子先生、2009年にホストであった齋藤文紀上席研究員、平野地質グループの田邊 晋氏、関西大学の西村昌也氏、名城大学の堀 和明氏、また現地での研究で多大な助力をいただいたベトナム国立大のVu Van Phai先生とベトナム地質鉱物局のNguyen Van Quy氏、ベトナム農業科学技術院のLe Van Tiem氏、そして多くの留学生仲間がこの場を借りてお礼申し上げます。

参 考 文 献

- Brierley, G. J., Ferguson, R. J. and Woolfe, K. J. (1997) : What is a fluvial levee? *Sedimentary Geology*, 114, 1-9.
- Funabiki, A., Haruyama, S., Nguyen, V. Q., Pham, V. and Dinh, T. H. (2007) : Holocene delta plain development in the Song Hong (Red River) delta, Vietnam. *Journal of Asian Earth Sciences*, 30, 518-529.
- Gourou, P. (1936) : *Le paysans du delta tonkinois*. Les Editions d'art et d'histoire, 666p.
- 春山成子・船引彩子・Le Van Tiem (2003) : 紅河下流平野における地形と洪水. *水利科学* 47, 50-55.
- Mathers, S.J. and Zalasiewicz, J.A. (1999) : Holocene sedimentary architecture of the Red River delta, Vietnam, *Journal of Coastal Research*, 15, 314-325.
- 西村正也 (2007) : 北部ヴェトナム紅河平原における輪中型堤防形成に関する試論. *東南アジア研究*, 45, 184-210.
- 桜井由躬雄 (1980) : 李朝期 (1010-1225) 紅河デルタ開拓試論-デルタ開拓における農学的適応の終末-. *東南アジア研究*, 18, 271-314.
- 桜井由躬雄 (1989a) : ハノイの憂鬱. めこん, 295p.
- 桜井由躬雄 (1989b) : 陳朝期紅河デルタ開拓試論 1. 西氾濫原の開拓. *東南アジア研究*, 17, 275-300.
- 桜井由躬雄・柴山 守 (2007) : タンロン-ハノイの遺跡・碑文分布のGIS4D分析シンポジウム「地域研究と情報学：新たな地平を拓く」講演論文集, 37-53.
- 渡辺和明 (2008) : メコンデルタ海岸測量記. *地質ニュース* no.650, 2-14.
- 米澤 剛 (2008) : ハノイの三次元都市モデルの構築に向けて. *アジア遊学*, 113, 168-174.

FUNABIKI Ayako (2011) : A Geographer's Hanoi notes.

< 受付 : 2010年7月27日 >